

記念碑的景観についての考察その2

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭

1. まえがき

都市の人間化の大切さが叫ばれるようになって久しい。この間多彩な研究と提案がなされてきたがジッテの著「都市をつくる術」を祖とする多くは空間論的提案であった。これに対し筆者の研究は都市の核(コア)ともなるべき記念碑的景観(memorial scape)を定義し、この景観の形態と意味を浮き彫りにするための分析枠組の提示を目的とする意味論的研究である。昨年はシーン景観の2・3のケーススタディを行ったが、ここではシーケンス景観としての街路景観と広場の景観の分析を試みる。

2 分析枠組としての都市アメニティ評価分析モデル

都市環境の分析に際して次のような視点、すなわち都市アメニティ(都市の快適環境)と都市コミュニティ(都市共同体)の2つの尺度で接近するものとし、1軸を都市アメニティ、もう1つの軸(2軸)を都市コミュニティとして2軸を交差させて、都市アメニティ評価分析モデルを描き出した(図-1)。

この分析モデルから4つのタイプの都市環境が描かれる。①緑空間 ②機能空間、③歴史的景観、④パーソナル景観である。

図-1において第2象限の空間は人間の生存と生活にかかわる条件を象徴的に表現する空間であり、第4象限の景観は主体によりいくつかの代替反応を引き起こす多様な意味を内包する、したがって都市に個性と奥行きをもたらす景観であり、第1象限の市民の共通の思い出となるような景観は市民の共有する文化についての記憶を呼び起こすような景観であり第3象限の空間は主体の孤独にかかわる要件を象徴的に表現する空間である。

さて、機能空間、パーソナル景観、歴史的景観、そして緑空間のこの4つのタイプの都市環境が美的形式原理にもとづいたひとつの景観として、つまりバランスよく形式的に統一された眺めとして与えられると空間・景観のありように豊かで確かな意味の脈絡が生じ、景観の深さと密度を高める。この景観をここでは市民にとって豊かで忘れがたい景観という意味で記念碑的景観(memorial scape)と呼んでいる。

図-1の分析枠組によって示されるように記念碑的景観は人間・社会的背景と密接な関係にあることがわかる。

3. ケーススタディ

街路景観としてパリのジャンセリゼ通り(フランス)、ミュンヘンのノイハウザーシュトラッセ(西ドイツ)を、広場景観としてヴェネツィアのサン・マルコ広場(イタリア)、フィレンツェのシニョリア広場(イ

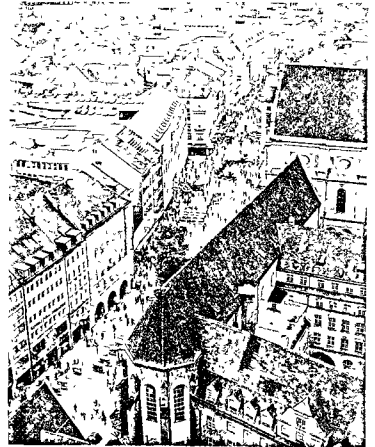
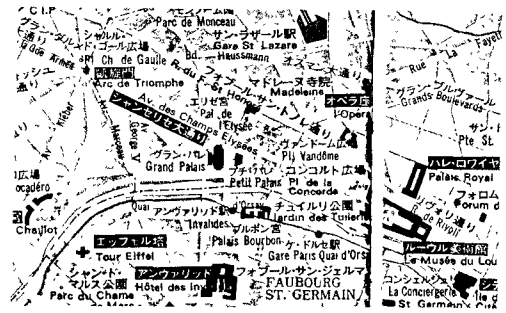
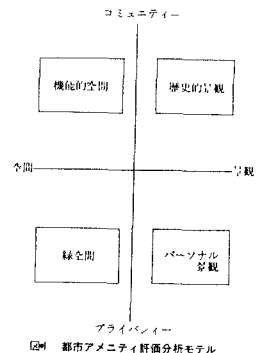


写真1 ノイハウザーシュトラッセ(ミュンヘン)



map 1 ジャンセリゼ通り(パリ)



タリヤ)を取り上げ分析すると次のように示される。

3-1 シャンゼリーゼ通り

凱旋門のあるエトワール広場からコンフォルド広場までの街路であり街路

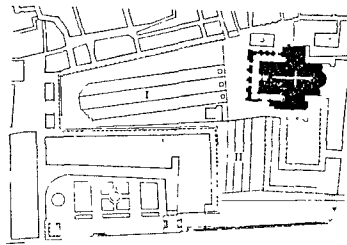
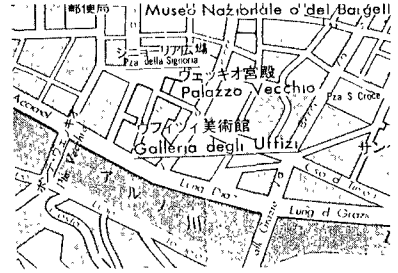


図-2 サン・マルコ広場(ヴェネツィア)



map 2 シニョーリア広場(フィレンツェ)

延長 $L \approx 2 \text{ km}$, 街路幅員 $D = 70 \text{ m}$, 歩道幅員 $D_s = 12 \text{ m}$. 沿道の建物の高さ $H \approx 25 \text{ m} \sim 30 \text{ m}$ (8~10階)の街路であるので街路幅員延長比 $D/L \approx 1/30$, 歩道幅員比 $D_s/D \approx 1/6$, 街路幅員建物高さ比 $D/H \approx 2.5 \sim 3$ のプロポーションからなる街路である。この街路はエトワール広場とコンフォルド広場のほぼ中間点(エトワール広場から1kmの地点)で景観は分節し商店街(エトワール広場側)からmallになっている。コンフォルド広場の奥にはティルリー(元宮殿、現公園)ルーヴル宮殿が位置している。つまりエトワール広場からルーヴルへと向って機能空間-緑空間-歴史的景観が街路(ゆるく緩断勾配のついた)景観軸で統一されており記念碑的街路景観の基本型をみることができる。(map 1.)

3-2 ミュンヘンのノイハウザーシュトラッセ

カールプラッツから市庁舎のあるマリーエンプラッツまでの街路であり、 $L = 725 \text{ m}$, $D = 31 \sim 49 \text{ m}$, $H = 15 \text{ m} \sim 24 \text{ m}$ (5~8階)の街路であるので、

$D/L \approx 1/23 \sim 1/13$, $D/H \approx 2 \sim 3$ のプロポーションからなる街路である。世界で最も美しいショッピングモールといわれているもので機能空間の要素要素に歴史的景観を混在させ、修景ポイントに緑空間を取り込むなど質の高いデザインになっている。加えて壁面線が不規則であるので少しの視点の移動での見えの変化が大きく広場が連続しているようなデザインをなしている。(写真1)

3-3 サン・マルコ広場

サン・マルコ広場はサン・マルコのバシリカに対し奥行型の広場(I)とドゥカーレ宮殿に対して平行でサン・ジョルジョ・マッジョーレ島をそのを運河に対しては奥行型の広場(II)との結合によって作られている。(図-2) 商業空間(機能空間)と大運河(緑空間)が広場の中央に位置する塔、バシリカ(歴史的景観)によって美しく統一された広場である。シャンゼリーゼ通りのようなタイアの街路軸をほぼ90°曲げたものと解釈できる。(図-2, 写真-2)

3-4 シニョーリア広場

シニョーリア広場はジェッキオ宮殿前の広場とこれに接してアルノ川へのぞむウフィツィ宮の回廊の第二の広場との結合によって作られている。シニョーリア広場は商業空間(機能空間)とアルノ川(緑空間)をジェッキオ宮殿(歴史的景観)によって統一するものであり、サン・マルコ広場と同様の解釈ができるが、広場の建築の壁面線が不規則であることから4つの事例の中では最もすぐれたデザインにみえるといえる。

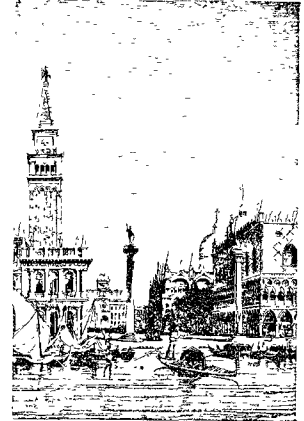


写真-2 サン・マルコのピラツツ(ヴェネツィア)

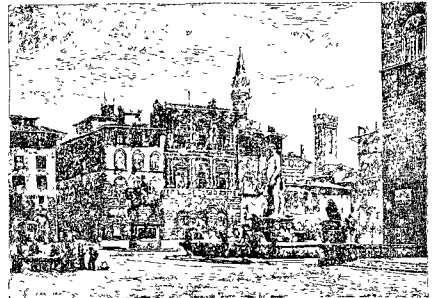


写真-3 シニョーリア広場(フィレンツェ)

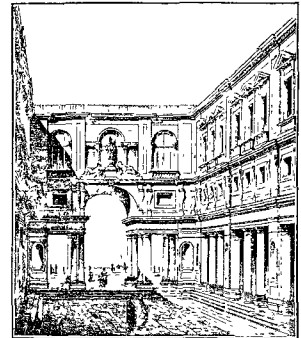


写真-4 シニョーリア広場・ウフィツィ宮の回廊(フィレンツェ)